

ベルマーク便り コンクール



2019年度ベルマーク便りコンクールは過去5年で最多の115校からの応募があり、優秀賞10校、佳作・特別賞各6校が選ばされました。入賞校のうち8校を訪問し、日ごろの活動ぶりや、子どもたちに向かっての思いなどを伺いました。

入賞校を訪ねて

優秀賞 葉山町立葉山小学校

神奈川県葉山町にある町立葉山小学校(富樫俊夫校長・児童684人)が初めての応募で優秀賞を受賞しました。ベルマーク便り「ベルまま通信」を作成しているのは、PTA厚生委員長の佐藤香さんです。



副委員長の柳下あゆみさん、西尾智子さんと一緒に力を合わせて活動しています。

「ベルまま通信」は、すべて手書き。「読む立場になったときに、目につく手紙って何だろう」と考えたからといいます。太字と細字を使い分け、ベルマークファミリーのイラストを上手く活用し、情報を的確に伝えているのが特徴です。「お便りを書いた経験なんて全くなかった」という佐藤さんですが、書いているうちに楽しくなり、「自分の才能がどんどん発揮された」と笑います。

ベルマークは年4回、仕分け・集計作業します。厚生委員会は正副委員長しか

いないため、ボランティアが頼り。多いときは20人ほど集まるそうです。回収袋は児童に自作してもらいます。

そのほか活動は多岐にわたります。ダンボールで自作した回収箱を校内に置き、立体的なポスターをあちこちに貼り、土曜参観日に「ベルマーク商品展示コーナー」を設け、子どもたちへの周知を目的に「ベルマーク川柳」を募集し……。学校も、3年生が購入するリコーダーのマークを回収するなど協力的です。

富樫校長は「皆さん常に『学校にとって何が必要ですか』と支援の手を差し伸べてくれるので、本当に有り難いです」と感謝します。

保護者のベルマーク活動が盛り上がっているのを見た先生から「ぜひ児童にも手伝わせてもらえませんか」との提案もあったそうで、同校のベルマーク活動は今後も発展していきそうです。



優秀賞 聖ミカエル幼稚園

北海道札幌市にある聖ミカエル幼稚園(園児87人)のお便り「Bellmark News」を作成しているのは、「ミカエル幼稚園父母の会」会長の木村奈津恵さん。役員のメンバーは、副会長の横山留奈さんと木村晴子さん、会計の遠藤梢さん、会計監



査の中川亜美さんと打矢優紀さん、記録の森優子さんです。

年2回、回収袋を集めた後、役員以外の保護者も集まって作業をします。その名は「ベルマーク茶話会」。お便りには茶話会の様子も掲載し、皆さんに感謝の気持ちを伝えました。

お便りを通して、「『ベルマーク活動って楽しい』ということを父母の皆さんに知ってもらいたい」と考えており、それがより伝わるように写真を多く載せている点がアピールポイントです。

6月には、さらに活動を盛り上げるため、ベルマークをテーマにしたペーパ

サートを子どもたちに披露しました。伝えたかったのは、ベルマークが困っているおともだちを助けることのできる「魔法のマーク」であること。それを証明するかのように、同園は11月、台風・大雨被害被災校のための友愛援助に寄付し、「魔法のマーク」であることを実証してくれました。ペーパーサートは保護者に対しても「ベルマークは必ず我が子に還元される」ことを伝える狙いがあります。

そのような活動ぶりを見て、渡部良子園長は「何年もかけてやっと集めていたような点数を、あっという間に集めてくださいました」と驚いたそうです。

「みんなが楽しい『ミカエルライフ』を送れるようにしたい」という気持ちを原動力に、フルタイムで働きつつ、パワフルに活動してきた木村さん。「役員の協力、優しい先生方に恵まれて活動できています」と、感謝の気持ちを大切にしています。木村さんとお話をしていると、その優しいお人柄が伝わってきました。



佳作 札幌市立山の手南小学校

札幌市立山の手南小学校(山本豊校長・児童448人)では、保護者によるボランティア「ベルつきー's」が活動し、お便りの「Let'sベルつきー's」を発行しています。代表は前鼻久美子さん、お便りを作成しているのは書記の桑島純枝さんです。学校側の担当は品田亜希江先生で、ボランティアの皆さんとの間をつなぐ役割を担っています。

桑島さんは「感謝の気持ちを載せることや、文字ばかり書いてスルーされないようにすること、すっきりしたレイアウトを意識すること」を心がけています。

4月19日に配布された、今年度第1号に書かれていたのは「存続の危機」という文字。目立つように太字で、さらに下線が引いてありました。

山の手南小は2017年度、北海道の参加校1291校のうち集票点数33位という実績をあげましたが、翌年度は「集計しきれずたくさんのベルマークが残ってし



まった」そうで、その切実な思いが綴られていきました。あえて危機感を全面に出した異例のお便りでしたが、その後「私でよかったら」と声をかけてくれる保護者が出てきました。

結果的に、ボランティアのメンバーは26人に増えました。今年はカートリッジ類の集計や整理袋の記入まで手が回るようになりました。毎回強制ではなく、参加できるタイミングで作業をもらっています。

ボランティアは毎年新しく登録するため、前鼻さんは「来年もたくさんの方に参加していただけたら嬉しい」と願っています。また、桑島さんは「学校のことを知ることができると、子どもたちの様子も見られる。お母さんたちとしゃべりながら交流したり、先生とも顔を合わせられたり……。ボランティアっていいなと思います。もっとみんなやつたらいいのにな」と魅力を語ってくれました。



佳作 堀市立登美丘東幼稚園

ベルマーク運動への参加は1983年。しかし少子化などの影響で園児が減り、「点数を集めるのが大変になったからか、4年前に就任したときは、ベルマーク活動は全く行われていませんでした」と平井純子園長。

そんなベルマーク活動が復活したのは



2018年度。立ち上げたのはPTAベルマーク委員の楠木恭子さんです。近所の市立登美丘西小学校でベルマーク活動の経験があり、「どうやればいいか知っていた。ベルマークなら家でもできるし、子どもたちに還元できると思ったから」。

すると、いきなり5月にとても多くのマークが寄せられ、びっくりしたそうです。「昔のクセで集めていたというおじいちゃんやおばあちゃんが、園の活動再開を知って大量に出してくれました」。運動が止まっていた間もマークを貯めていたのです。復活初年度に集まったマー

クは、合計1万点を超みました。

お便りは「ベルマーク点数のお知らせ」と題して毎月発行。すべて手書きです。「パソコンで作ったお知らせは、よく読まない人も多い。手書きなら逆に目を引くと思って」と楠木さん。毎月の集計結果の数字を大きく載せ、マークの会社別ランキングや、号によっては多く持ってきた園児の名前とお礼、ベルマーク運動の仕組みなどが書かれています。イラストや商品の写真も豊富です。一人一人の顔の見える、とても温かみのある紙面です。

園児たちのベルマークへの関心も高まっているよう。ベルマーク委員の江藤由希子さんは「上の子が通う小学校でもベルマークを集めているので、どちらに持っていくかで取り合いになっています」と言います。買い物に行ってもベルマーク商品を探して「これに付いていく」と教えてくれるそうです。

